

小学校学習指導要領及び解説における道德教育の評価に関する規定の変遷

	学習指導要領	学習指導要領解説
昭和33年	第3 指導計画作成および指導上の留意事項 10 <u>児童の道德性について評価することは、指導上たいせつなことである。しかし道德の時間だけについての児童の態度や理解などを、教科における評定と同様に評定することは適当ではない</u>	第2章 指導計画と指導方法 4. 道德の評価 道德も一定の目標と計画に従って指導されるかぎり、 <u>評価を必要とする</u> 。しかし各教科の場合のように、 <u>成績の優劣を評点によって評価することは妥当ではない</u> 。道德は人格の全体に関連するから、その評価も人格の全体にわたって総合的な立場をとる必要がある。もちろん道德的知識や判断についてはかなり客観的に測定しうる方法も考えられるが、それらについても心情・態度・行動などとの関連において総合的に解釈されることが望ましい。 心情や態度は測定の困難な領域であり、次のような広い角度から評価の資料を求める必要がある。 教師による評価—観察，面接，テストなど 児童の自己評価—チェックリスト，作文など 友人による評価—ゲスフーテストなど 父母による評価—質問紙，報告，教師との面接など 評価の結果，児童の道德性に望ましくない点が発見された場合には，できるだけ早く適切な方法を講じて指導しなければならない。そのためにはふだんから，その指導に必要な資料を整えておくことも道德の評価では重要である。その資料としては，①家庭および近隣社会の環境，②親の態度と児童への要求，③児童の生活の実態，④児童の要求，などが役立つであろう。 指導要録における「行動および性格の記録」の「Ⅱ評定」は，児童の生活において指導されるべき望ましい項目を取り上げているので，その多くは道德に関係し，道德教育の内容となるものである。したがって，道德の評価と「行動および性格の記録」との関係はきわめて密接である。特に道德の評価が態度とか行動について行なわれるときには，「Ⅱ評定」における項目の評価とまったく一致することが少なくない。それゆえ，道德の評価の計画においても，実際の評価のしかたや記録においても，「行動および性格の記録」との関連をあらかじめ考慮し，できるだけ両者を一体として有機的に取り扱うことが必要である。 なお，実施した計画や方法を評価することによって，計画や方法自体を改善することも，道德の評価の重要な一面として忘れてはならない。
昭和43年	第3 指導計画の作成と内容の取り扱い 4 <u>児童の道德性について評価することは、指導上たいせつなことであるが、道德の時間だけについての児童の理解や態度などを、各教科における評定と同様に評定してはならない</u> 。	第4節 道德教育の評価 1 評価のねらい 道德教育についての評価には，二つの面があると考えられる。一つは，児童の道德性が指導の結果どれだけ高まったかであり，他の一つは，教師による指導計画がどれだけ適切に作成され，指導方法がどれだけ効果的に用いられたかである。 児童の道德性を評価する場合注意しなければならないのは，道德の時間だけについての児童の理解や態度などを，各教科における評定と同様に評定してはならないということである。 2 道德性の評価 (1) 道德性の評価の意義 ひとりひとりの児童や学級，学校の全児童の道德性が道德教育の目標や内容に照らして， <u>どの程度身についたかを明らかにするのが道德性の評価</u> である。 本来，道德教育は人格の全体に関連するものであるから，その評価も人格の全体にわたって総合的に行われるものでなければならない。しかしながら，このことは技術的にみてかなり困難なことである。もちろん，道德的な判断力については，ある程度客観的に測定する方法も考えられるが，道德的心情や道德的態度についての評価は，かなりの困難を伴うとされている。要するに，このような道德的判断力の評価と道德的心情や道德的態度の評価とを区別して考えること自体が一つの便法なのであるから，その解釈においては，これらを相互に関連させ，

広い視野に立って評定するという配慮が必要である。

道徳的な判断力ないしは道徳的心情、道徳的態度などの評価の観点としては、次のような内容が考えられるであろう。

まず、道徳的な判断力の評価とは、児童が善悪についてどれだけ知的に理解しているか、そして、自主的で正しい判断がどれだけできるようになったかということについての評価である。次に、道徳的心情の評価とは、道徳的に望ましい感じ方や考え方や行為に対しての喜びや楽しみの感情がどれだけつちかわれたかを評価することである。さらに、道徳的態度の評価とは、善を行い悪を避けようとする行動への構えが、どれだけ児童に定着してきたかを評価することである。

(2) 道徳性の評価の方法

児童の道徳性を評価する方法としては、いろいろ考えられるが、ここでは一般的なものをあげておく。

ア 観察による方法

児童の自然のままの行動を観察し、記録する方法である。この方法は道徳的習慣の評価だけでなく、道徳的判断や心情および態度など道徳性の各様相にわたって評価することができる基本的なものである。しかしながら、本来、観察法の場合には解釈が主観的になりやすい傾向があるので、あらかじめ観察の着眼点をきめて記録するチェックリストや評定尺度を用いるなどして、できるだけ評価を客観的にすることが必要である。

イ 面接による方法

直接児童と対話し、対話によってその考え方をとらえる方法である。この方法は面接の進行に伴って相手の話し方や表情からその心情や態度までをうかがうことが可能なので、道徳的判断力、道徳的心情ないしは道徳的態度の評価に有効な方法となろう。ただし、面接法で望ましい効果をあげるためには、かなりな技術が必要であり、また、児童との間の親密な関係が不可欠の条件である。

ウ 質問紙、検査などによる方法

質問紙法は、教師が評価項目ごとにあらかじめ作成した質問事項を児童に筆答させ、必要な資料を数多く収集しようとするもので、主として、道徳的判断力や道徳的態度の評価に適した方法である。また、友人による相互評価法であるゲスフーテストも利用できる。

検査法は、児童が問題場面に当面して、善悪を正しく判断することができるかどうかについて構成した検査を用いる方法であり、主として道徳的判断力の測定に適していよう。また、観察法や質問紙法などではなかなかとらえにくい児童の道徳的心情を、多義的に解釈される絵や文章を提示し、その反応によってとらえようとする方法もある。

しかしながら、これらの質問紙法や検査法は、児童の道徳性評価の方法としてはそれ自体限界のあることを忘れず、また、その利用にあたっては、主観的な分析や解釈をできるだけ避けるようくふうすることが望ましい。

エ 作文による方法

作文には、児童の生活体験や反省、希望などが述べられるものであるから、児童の意識の内容を直接に知ることができる場合が多い。したがって、道徳の時間の指導の終末段階や事後指導などにおいて書かせた作文には、主題に関する児童の判断や心情の傾向が表現されているものが多い。ただし、この方法によって道徳性を評価する場合には、前提として教師と児童との間に深い信頼感があること、また、教師に真偽を見わける力などが要請される。

なお、児童の個人またはグループの日記なども道徳性の評価の資料として役だつてであろう。

(3) 道徳性の評価に関する留意事項

児童の道徳性の評価にあたっては、なお次のような事項に留意することが必要である。

ア 上述の諸方法には、評価の観点の違いによって一長一短が伴いがちである。したがって評価の妥当性を期するためには、いくつかの方法を互いに補足しあい、広い視野に立って総合的に用いることが必要となるであろう。

イ 収集した評価資料の整理にあたって、必要な資料の不足に気づいたり、矛盾する資料を発見したりした場合は、解釈を急ぐことなく、さらによくわしい情報や資料の収集に努めるべきである。一般的には、道徳教育の効果は短時日には期待できないものであるから、教師は根気よく長い目で児童の変化を観察し、評価する心がまえが必要である。

		<p>ウ 評価の結果、道徳性に関してなんらかの問題点をもつ児童が発見された場合は、その原因を究明して指導や処置にあたらなければならない。そしてその結果としての児童の変容をふたたび資料の中に加え、<u>評価に関する事例研究的な扱いを推進すべきである。</u></p> <p>エ 児童の道徳性の評価においても、児童の生活環境を知ることがたいせつである。その場合の資料としては、①家庭および近隣社会の環境、②親の態度と児童への要求、③児童の生活の実態、④児童の要求などが考えられる。それらを必要度に応じて適宜整えておくことが望まれる。</p>
<p>昭和52年</p>	<p>第3 指導計画の作成と内容の取扱い</p> <p>5 <u>児童の道徳性については、常にその実態を把握するよう努める必要がある。しかし、各教科における評定と同様の評定を、道徳の時間に関して行うことは適切ではない。</u></p>	<p>第4章 道徳教育における評価</p> <p>1 道徳教育における評価の意義</p> <p>道徳教育における評価には、児童の道徳性が指導によってどれだけ高められたかという児童に関する面と、指導計画や指導方法が適切かどうかという指導に関する面との二つが考えられる。</p> <p>道徳性の評価とは、ひとひとりの児童や学級、学年、学校の全児童の道徳性が道徳教育の目標や内容に照らしてどの程度身につくか、どういう実態にあるかを把握することであり、学習指導要領第3章「道徳」の「第3の5」にも、「児童の道徳性については、常にその実態を把握するよう努める必要がある。」と示されているのである。ただ、「各教科における評定と同様の評定を、道徳の時間に関して行うことは適切ではない。」と特に規定されていることに注意しなければならない。</p> <p>本来、道徳教育は人格の全体にかかわるものであるから、道徳性の評価も人格の全体にわたり生活の全領域に広げて行われなければならない。しかし、このことは技術的にみてかなり困難なことである。</p> <p>一般には便宜上、道徳的判断力、道徳的心情、道徳的態度と実践意欲の三つの様相に分析して評価することが多いが、その解釈に当たっては、これらを相互に関連させ広い視野に立って長い眼で見つめ、総合的に評価していくことが大切である。</p> <p><u>道徳的判断力の評価では、児童が善悪についてどれだけ知的に正しく理解しているか、そして、問題場面に直面して自主的にどれだけ正しい判断ができるかについて評価し、道徳的心情の評価では、道徳的に望ましい感じ方、考え方や望ましい行為に対して喜びや楽しみ等の感情がどれだけ培われたかについて評価する。また、道徳的態度と実践意欲の評価では、善を行い悪を避けようとする意志の表れや行動への構えがどれだけ定着してきているかについて評価することとなる。</u></p> <p>指導計画や指導方法の評価は、学習指導要領第1章「総則」の「8の(4)」に「指導の成果を絶えず評価し、指導の改善に努めること。」とあるように、道徳の時間の指導及び全教育活動を通しての道徳教育を改善し、一層の効果を期待するために、児童の道徳性の評価と並行して、常に行われなければならないものである。</p> <p>2 評価の方法と評価の観点</p> <p>(1) 道徳性の評価の方法</p> <p>道徳性の評価には多様な方法が考えられるが、ここでは一般的なものを挙げておく。</p> <p><u>ア 観察による方法</u></p> <p>児童の自然のままの言動を観察し記録する方法であって、児童に気付かれずに道徳性の各面にわたって随時随所で評価できる。しかし、時間や労力がかかり、解釈が主観的になりやすい。そのため、ある条件(価値、場面、時間など)を設けて観察の視点を決め、例えば、記録用のチェックリストや評定尺度などを用意して、組織的、計画的、継続的に行い、客観性を保持しようとする方法もある。</p> <p><u>イ 面接による方法</u></p> <p>児童と直接対し、対話によって考え方や感じ方をとらえる方法であり、面接の進行に従い児童の話し方や表情から心情や態度までうかがうことができるので、道徳性の各面の評価に有効である。ただ、そのためにはかなりの技術の習慣と、面接者と児童との親密な信頼関係が必要であることを忘れてはならない。</p> <p><u>ウ 質問紙、検査などによる方法</u></p> <p>質問紙法は、教師があらかじめ作っておいた問題に筆答させ評価の資料を集める方法であり、自由記述や選択肢法などが考えられ、道徳的判断力や道徳的態度の評価に適している。また、児童の自己評価やゲス・フー・テスト、父母の目を通しての評価なども活用できる。</p> <p>検査法は、児童が問題場面に直面して正しく判断できるかどうかについて構成された検査を行う方法であり、主として道徳的判断力の評価に適しているが、判断した理由や心情を併せて問うことにより、道徳的態度や道徳的心情をとらえることもできる。</p>

		<p>エ 作文による方法 作文には、児童の生活体験や思考、反省、希望などが記述され、児童の道徳性を直接的に知り得る場合が多い。しかし、適切な評価を行うためには、教師と児童との深い信頼関係や教師に真偽を見抜く力が必要である。また、個人やグループの日記類も、道徳性の評価に活用できるであろう。</p> <p>(2) 道徳性の評価に関する留意事項 ア 道徳性のそれぞれの様相は互いに関連し合い、評価の諸方法にもそれぞれ一長一短がある。したがって、評価の妥当性を期するためには複数の方法を併用して補足し合い、広い視野に立って鋭い洞察力を働かせ、継続的、総合的に評価することが大切である。 イ 必要な資料の不足に気付いたり矛盾する資料を発見したりした場合には、解釈を急いではない。道徳教育の効果は短時日には期待できないのであるから、根気よく長い眼で児童の変容を観察する心構えが必要である。 ウ 道徳性に関して問題点をもつ児童が発見された場合には、その原因を究明して指導や処置に当たらなければならない。そして、その結果としての変容も資料の中に追加し、事例研究的な扱いを推進し指導することが大切である。 エ 道徳性の評価に際しても、<u>児童の生活環境</u>を知ることは重要なことである。その場合の資料としては、 (ア) 家庭や近隣社会の環境 (イ) 親の生活態度や児童への要求 (ウ) 児童の家庭生活の実態 (エ) 児童の要求 などが考えられる。</p>
平成元年	<p>第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い</p> <p>5 <u>児童の道徳性については、常にその実態を把握し指導に生かすよう努める必要がある。ただし、各教科における評定と同様の評定を、道徳の時間に関して行うことは適切ではない。</u></p>	<p>第5章 道徳における評価 第1節 道徳教育における評価の意義 教育における評価は、常に指導に生かされ、結果的に児童の成長につながるものでなければならない。道徳教育においては、児童の道徳性を評価し、指導の充実に生かすことが大切である。「第3章 道徳」の第3の5には、「児童の道徳性については、常にその実態を把握し指導に生かすよう努める必要がある。」と示されている。 そして、それに続けて、「ただし、各教科における評定と同様の評定を、道徳の時間に関して行うことは適切ではない。」と特に明記されていることに留意しなければならない。道徳性の評価は人格の全体にかかわるものであり、不用意な評定をしてはならないのである。 なお、指導計画や指導方法の評価は、「第1章 総則」の第4の2の(9)に、「指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行うとともに、学習意欲の向上に生かすよう努めること。」と示されている。道徳の時間の指導及び全教育活動を通じての道徳教育の一層の充実のために、児童の道徳性評価と関連して行われる必要がある。</p> <p>第2節 道徳性の評価 1 評価の観点と方法 (1) 評価の観点 ア 教育者としての<u>姿勢</u> 道徳性は、児童の人格全体にかかわり、人間性そのものを規定するものである。したがって、その評価においては、極めて慎重な態度が要求される。特に、<u>教師自身が児童の道徳性をできるだけ客観的に見る目を養うと同時に、児童はよく生きようとしているという信念と、児童の成長を信じ、願う姿勢をもつことが大切である。</u>そのことによって、道徳性を評価する客観的な資料が、児童の道徳性を伸ばす指導のための基礎資料として積極的な意味をもって来る。道徳性の評価においては、<u>共感的な理解を伴う評価が必要</u>なのである。 なお、教師が道徳性を把握するには、児童が教師に対して安心して心を開くことのできる状態をつくる必要がある。その基本は、信頼関係である。児童を受容し、尊重する姿勢が求められる。</p> <p>イ 道徳性の諸様相の評価 学校教育における道徳性の評価は、基本的には道徳の内容項目をどの程度調和的に内面化しているかをみるものである。一般的には、道徳的心情、道徳的判断力、道徳的实践意欲と態度並びに道徳的習慣について分析し評価することが多い。 <u>道徳的心情では、道徳的に望ましい感じ方、考え方や望ましい行為に対して、喜びや楽しみの感情がどれ</u></p>

だけ培われたかについて評価する。

道徳的判断力の評価では、児童が善悪についてどれだけ知的に正しく理解しているか、そして、問題場面に直面して自主的にどれだけ正しい判断ができるかについて評価する。

道徳的実践意欲と態度の評価では、善を行い悪を避けようとする意志の表れや行動への構えが、どれだけ定着してきているかについて評価する。

また、道徳的習慣は、特に基本的な生活習慣をどの程度身に付け実践できているかを評価することになる。

(2) 評価の方法

道徳性への評価には多様なものがあるが、評価のための資料収集の方法には、一般的なものとして次のものがある。

ア 観察による方法

児童の自然のままの言動を観察し記録する方法で、児童に気付かれずに道徳性の各面にわたり随時に評価できる。しかし、時間や労力がかかり、解釈が主観的になりやすい。そこで、ある条件(価値、場面、時間など)を設けて観察の視点を決め、記録用のチェックリストや評定尺度などを用意して、組織的、計画的、継続的に観察を行い、客観性を保持しようとする方法もある。その際、観察から得られた資料から、外に表れた行動の背景にある児童の気持ちを理解する必要がある。

イ 面接による方法

直接に児童と相対して話し合うことで、児童の道徳的な感じ方や考え方などを評価しようとする方法である。面接が深まれば、児童の話すことの内容や話し方、表情からも道徳的心情、判断力や態度まで評価することができる。そのためには、面接の心構えや技法の習得に努める必要がある。

ウ 質問紙、検査などによる方法

質問紙法は、教師があらかじめ作成した質問に回答させることにより、必要な資料を収集しようとするものである。児童の自己評価やゲス・フー・テスト、保護者の目を通しての評価なども活用できる。

また、検査法は、児童が問題場面に直面して、主としてどのような判断ができるかを見るための方法であり、道徳的判断力の評価に適している。さらに、判断した理由や心情を併せて問うことで、道徳的心情や態度を見ることもできる。その他、文章完成法なども用いられる。

エ 作文による方法

作文には、児童の生活体験、反省、意見、希望などが感情を伴って述べられるので、児童の道徳性を直接的に知りうる場合が多い。また、個人やグループの日記や道徳のノートも有効な資料となる。作文法による評価においては、作文の行間に込められた道徳的な感じ方や考え方を的確に読み取る能力が必要である。また、児童の作文を受容的な立場から感想を書いて返却することは、児童の自己理解と意欲的な態度の育成に役に立つ。

オ その他の方法

その他、事例研究法や投影法などもある。事例研究法によって問題とされる事例の特徴とその形成過程について吟味することは、特に問題傾向のある児童の評価と指導に有効である。

2 評価の活用と留意点

児童の道徳性への評価では、次のような点に留意する必要がある。

ア 一つの方法に頼らないで、それぞれの特徴を生かして幾つかの方法を併用し、広い視野から継続的、総合的に評価することが大切である。

イ 道徳教育の効果は、短期間に多くは期待できないものであるため、根気よく長い目で児童の変容を観察する心構えが必要である。

ウ 資料の結果から、特に指導を要する児童に気付けば、直ちに適切な指導を行わなければならない。その場合、学級全体に対する指導と同時に、個別に相談的な指導を行う必要がある。その際、経験豊かな教師の助言を求めたり、ときには学年や学級全体で取り組むようにすることも大切である。

エ 児童の生活を知ること重要である。その場合の資料としては、(ア)社会などの環境、(イ)親の生活態度や児童への養育態度、(ウ)児童の家庭生活の実態、などが考えられる。

オ その他、留意点として、評価の観点を固定的に考えず、児童のよさや個性を積極的に評価できるように多面的な評価基準を工夫していくことが大切である。また、評価結果の適切なフィード・バックを心掛けるとともに、次の指導に生かされるよう配慮する必要がある。

なお、これらは個人の人格や人権にかかわるものを含んでおり、資料の収集の仕方及び評価結果や収集した資料の扱いなどには、特に慎重でなければならない。

平成10年	<p>第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い</p> <p>5 <u>児童の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある。ただし、道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする。</u></p>	<p>第7章 道徳教育における児童理解と評価</p> <p>第1節 道徳教育における児童理解と評価の意義</p> <p>教育における評価は、常に指導に生かされ、結果的に児童の成長につながるものでなければならない。「第1章 総則」の「第5 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の2の(10)で、「児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること。」と示されている。道徳教育における評価は、教師が児童の人間的な成長を見守り、よりよく生きようとする努力を評価し、勇気づけるはたらきをもつものであるといえる。</p> <p>児童の道徳性については、一人一人の児童が道徳教育の目標や内容を窓口として、どの程度成長したかを明らかにするように努めることが大切である。それは、客観的な理解の対象とされるものではなく、教師と児童の温かな人格的な触れ合いやカウンセリング・マインドに基づいて、共感的に理解されるべきものである。また、道徳性は、人格の全体にかかわるものであり、数値などによって不用意に評価してはならない。「第3章 道徳」の第3の5に「道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする。」と明記されている。</p> <p>教師は、児童の道徳性の実態を把握し、その結果を踏まえて指導の計画や方法を練る必要がある。指導の前後における児童の心の動きの変容などを様々な方法でとらえ、それによって自らの指導を評価するとともに、指導方法などの改善に努めることが大切である。</p> <p>第2節 道徳性の理解と評価</p> <p>1 理解と評価の観点と方法</p> <p>(1) 理解の観点</p> <p>ア 児童との心の触れ合いを基盤に</p> <p>道徳性は、児童の人格全体にかかわり、人間性を規定するものである。したがって、その理解や評価については、極めて慎重な態度が求められる。もちろん教師には、偏見や独断によらず、児童の道徳性をできるだけ正確に理解し評価する目を養うことが要求されるが、いくつかの調査の結果を過信して、児童の道徳性を客観的に理解し評価しえたかのように思うことは、厳に慎むべきである。それらの調査の結果もまた、教師と児童との関係そのものによって大きく左右されるのである。</p> <p>教師にとって最も重要なのは、児童は一人一人がよりよく生きる力をもっているという信念と、児童の成長を信じ願う姿勢をもつことである。そして、教師自らが心を開き、児童と心が触れ合えるようにしようとするのが大切である。<u>児童一人一人がもつよりよく生きる力を信じ、そのような存在としての児童を無条件に尊重し、受容する関係の中で、児童のよりよく生きる力は存分に発揮される。</u></p> <p>道徳性の理解は、このような教師と児童の心の触れ合いの中でなされる共感的理解によるべきである。後に述べる様々な道徳性の理解や評価の方法も、この共感的な理解を豊かなものとするための基礎資料として位置付けられる。</p> <p>イ 道徳性の諸様相の理解</p> <p>道徳性は本来、児童の全人格にかかわるものであり、いくつかの要素に分けられるものではない。しかし、その理解と評価にあたっては、指導との関係から、道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲と態度及び道徳的習慣について分析することが多い。</p> <p><u>道徳的心情については、道徳的に望ましい感じ方、考え方や行為に対して、あるいは逆に、道徳的に望ましくない感じ方、考え方や行為に対して、児童がどのような感情をもっているか等を把握する必要がある。</u></p> <p><u>道徳的判断力については、道徳的諸価値についてどのようにとらえているか、また、道徳的な判断を下す必要がある問題場面に直面した際に、児童がどのように思考し判断するか等を把握する必要がある。</u></p> <p><u>道徳的実践意欲と態度については、学校や家庭での生活の中で、道徳的によりよく生きようとする意志の表れや行動への構えが、どれだけ芽生え、また定着しつつあるか等を把握する必要がある。</u></p> <p>また、道徳的習慣は、特に基本的な生活習慣をどの程度身に付け実践できているかを把握することになる。</p> <p>(2) 共感的理解と評価の方法</p> <p>道徳性を理解し評価するための方法には多様なものがあるが、学校生活における教師と児童の心の触れ合いを通して、児童の道徳性を共感的に理解し評価するものでなければならない。その意味で、以下に述べるすべての方法は、そのような道徳性の共感的理解を深めるためのものであるととらえられる。</p>
-------	---	---

ア 観察による方法

児童の自然のままを観察し記録する方法である。ある時間や場面などに一定の枠を設け、観察の視点を決めて、記録用のチェックリストなどを用意して、組織的、計画的、継続的に観察を行う方法もある。その際、観察で得られた資料から、外に現れた行動や態度の背景にある児童の気持ちを理解することが大切である。

なお、観察の方法には、回りから観察する方法と、一緒に活動しながら観察する方法とがある。後者は、日常的に行っているものであり、そのときはメモなどをしておき、後で簡単にまとめるといった方法や、授業中に意図的に指名したり、休み時間等に意図的に話しかけながら様子を見るといった方法もある。休み時間や給食の時間などにおけるちょっとした対話や、教科の学習における何気ない発言や動きなどを通して、教師の児童理解は深められる。

イ 面接による方法

直接に児童と相対して話し合うことで、児童の道徳的な感じ方や考え方などを評価しようとする方法である。児童との人間関係が深まれば、児童の話すことの内容や話し方、表情からも道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲や態度などの内面をかなり理解できるようになる。そのためには、カウンセリング・マインドをはじめ、面接の心構えや技法の習得に努める必要がある。

ウ 質問紙などによる方法

質問紙法は、教師があらかじめ作成した質問に回答してもらうことによって、必要な情報を収集するものである。道徳性に関する児童の自己評価を知る上で有効であるのみならず、児童の自己理解を深めることにも役に立つ。また、指導の前後に行えば児童の自己評価の変容を知ることができ、教師の指導法改善のデータにもなる。

その他の例としては、各内容項目ごとの成長の実態把握、「自分のがんばっている所」「自分でよいと思う所」などの把握、道徳性の発達状況の把握などがある。しかし、これらは、児童を取り巻く環境や学校生活の様子、教師との人間関係などによって大きく左右される。あくまで、児童を共感的に理解していく上での一資料として扱うべきものである。

なお、頻繁に質問紙法を行い、対応をおろそかにしていると、教師と児童との人間関係を損なうこともあることに注意する必要がある。

エ 作文や日記、ノート、ワークシートなどによる方法

児童の作文や日記、道徳ノートなどは、児童が日ごろ感じ考えていることを直接に知ることができる貴重な資料である。しかし、作文や日記などに書かれている内容から直ちに道徳的な評価を下すのではなく、行間に込められた思いを共感的に理解する姿勢が大切である。

また、ワークシートを様々に工夫することによって、児童の心の動きを知ることができるのみならず、児童自身も学習での気付きや自己理解・自己評価、他者理解(相互に交換することによって)等を深めることができる。

なお、これらの作文やノート、ワークシートに、共感的・受容的なコメントを加えて返却することは、教師と児童の心の触れ合いを深め、児童のよりよく生きる意欲を喚起することにもなる。

オ その他の方法

事例研究法や各種のテストを用いる方法もある。事例研究法によって問題とされる事例の特徴とその形成過程について吟味することは、特に配慮を要する児童の理解と指導に有効である。

なお、テストを用いる場合は、その目的や注意事項をよく理解して使用する必要がある。

2 理解と評価の創意工夫と留意点

児童の道徳性の理解と評価では、次のような点に留意する必要がある。

ア 児童との心の触れ合いを通して得られる共感的理解を基盤とし、広い視野から継続的・総合的に理解し評価することが大切である。

イ 道徳教育の効果は、比較的はっきりと表れるものと、短期間には多くは期待できないものがある。したがって、指導後に見られる児童の心の動きの変容などを的確にとらえる方法と、根気よく長い目で児童の変容を観察する方法とを併用する必要がある。

ウ 特に指導を要する児童に気付けば、直ちに適切な指導を行わなければならない。その場合、学級全体に対する指導と同時に、個別に相談的な指導を行う必要がある。経験豊かな教師やスクールカウンセラー等の専門家の助言を求めたり、ときには学年や学校全体で取り組むようにすることも大切である。

エ 児童の生活を知るための資料として、(ア)社会などの環境との関連、(イ)家庭での生活態度、(ウ)両親の養育態度なども考えられる。

		<p>オ <u>児童理解の観点を固定的に考えず、児童のよさや個性を積極的に認めていくことができる多面的な理解と評価が求められる。</u>また、児童の自己理解を深めるためのフィードバックや、次の指導にどう生かすかの工夫が必要となる。</p> <p>なお、これらは児童のプライバシーにかかわるものを含んでおり、資料の収集の仕方及びその結果や収集した資料の扱いなどについては、特に慎重でなくてはならない。</p>
平成20年	<p>第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い</p> <p>5 <u>児童の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある。ただし、道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする。</u></p>	<p>第8章 児童理解に基づく道徳教育の評価</p> <p>第1節 道徳教育における評価の意義</p> <p>教育における評価は、常に指導に生かされ、結果的に児童の成長につながるものではなくてはならない。「第1章 総則」の「第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の2の(11)では、「児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること」を示している。</p> <p>また、道徳教育における評価については、「第3章 道徳」の第3の5において、「児童の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある」と示している。一人一人の児童の道徳性が道徳教育の目標や内容を窓口として、どのように成長したかを明らかにするよう努めることが大切である。</p> <p>つまり、道徳教育における評価は、教師が児童の人間的な成長を見守り、児童自身が自己のよりよい生き方を求めていく努力を評価し、それを勇気付ける働きをもつものであるといえる。それは、客観的な理解の対象とされるものではなく、<u>教師と児童の温かな人格的な触れ合いやカウンセリング・マインドに基づいて、共感的に理解されるべきものである。</u></p> <p>それゆえ、「第3章 道徳」の第3の5に、上記に続けて「道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする」と示している。これは、道徳性は、人格の全体にかかわるものであり、数値などによって不用意に評価してはならないことを特に明記したものである。</p> <p>したがって、教師は、道徳の時間においてもこうした点を踏まえ、それぞれの指導のねらいとのかかわりにおいて児童の心の動きの変化などを様々な方法でとらえ、それによって自らの指導を評価するとともに、指導方法などの改善に努めることが大切である。</p> <p>第2節 道徳性の理解と評価</p> <p>1 評価の基本的態度</p> <p>道徳性は、児童の人格全体にかかわり、人間性が表れたものである。したがって、その理解や評価においては、きわめて慎重な態度が求められる。もちろん教師には、偏見や独断によらず、児童の道徳性をできるだけ正確に理解し評価する目を養うことが要求されるが、幾つかの調査の結果を過信して、児童の道徳性を客観的に理解し評価し得たかのように思い込むことは厳に慎むべきである。それらの調査の結果もまた、教師と児童の関係によって左右されるものだからである。</p> <p>教師にとって最も重要なのは、児童は一人一人がよりよく生きる力をもっているという信念と、児童の成長を信じ願う姿勢をもつことである。そして、教師自らが心を開き、児童と心と心の触れ合いをもとうと努めることである。児童一人一人がもつよりよく生きる力を信じ、<u>そのような存在としての児童を無条件に尊重し、受容する関係の中で、児童が自己のよりよい生き方を求めていく力は存分に発揮される。</u></p> <p>また、その際大切にすべきことは、児童自身が自己の姿をどのように理解し、自己のよりよい生き方を求めていく意欲や努力をどのように評価しているかを児童の立場に即して理解しようとすることである。そうすることで、児童の意欲や努力をその内面から支えていくことが可能になるからである。</p> <p>道徳性の理解は、このような教師と児童の心の触れ合いの中でなされる<u>共感的な理解</u>によるべきである。後に述べる様々な道徳性の理解や評価の方法によって得られたものも、こうした共感的な理解を豊かなものにする資料として位置付けられる。</p> <p>2 評価の観点と方法</p> <p>(1) 評価の観点</p> <p>道徳性は本来、児童の人格全体にかかわるものであり、幾つかの要素に分けられるものではない。しかし、その理解や評価に当たっては、指導の目標、ねらいや内容をその窓口とするが、それとともに、道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲と態度及び道徳的習慣などの観点から分析することが多い。</p>

道徳的心情については、道徳的に望ましい感じ方、考え方や行為に対して、あるいは逆に、道徳的に望ましくない感じ方、考え方や行為に対して、児童がどのような感情をもっているか等を把握する必要がある。

道徳的判断力については、道徳的諸価値についてどのようにとらえているか、また、道徳的な判断を下す必要がある問題場面に直面した際に、児童がどのように思考し判断するか等を把握する必要がある。

道徳的実践意欲と態度については、学校や家庭での生活の中で、道徳的によりよく生きようとする意志の表れや行動への構えが、どれだけ芽生え、また定着しつつあるか等を把握する必要がある。

また、道徳的習慣については、特に基本的な生活習慣をどの程度身に付け実践できているかを把握することになる。

(2) 評価の方法

道徳性を理解し評価するためには、そのための資料を収集する必要がある。その方法には多様なものがあるが、学校生活における教師と児童の心の触れ合いを通して、共感的に理解し評価するものでなければならない。その意味で、以下に述べるすべての方法は、児童にとっては自己評価を促すものであり、教師にとっては児童の道徳性の理解を深め、適切に評価し、指導を改善していく手掛かりとなるものである。

これらの方法には一長一短があるので、それぞれの特徴を押さえた上で、その都度適切な方法を生かすように努める必要がある。

ア 観察や会話による方法

児童のあるがまを観察したり、児童との会話の中で得られたものを生かして記録したりする方法であり、毎日の生活や学習の中で行われる。この方法で大切なことは、観察の積み上げである。指導のねらいや方法に応じて、あらかじめ観察の観点を定めるなどして、計画的、継続的に観察を行う方法もある。また、一緒に活動しながら観察したり、意図的に話しかけたり、授業で意図的に指名をしたりして様子を見るといったことも考えられる。その際、外に表れた言葉や行動からだけで判断するのではなく、態度や表情の微妙な変化からその背景にある心の動きをとらえるなど、児童の内面の理解に努めることが大切である。

イ 作文やノートなどの記述による方法

児童の作文や日記などは、児童が日ごろ感じ考えていることを直接に知ることができる貴重な資料である。しかし、そこに書かれている内容から直ちに道徳的な評価を下すのではなく、行間に込められた思いを共感的に理解する姿勢が大切である。

また、道徳の時間をはじめとする各教科等の学習におけるノートなどへの記述は、その学習のねらいや内容に関する児童の心の動きなどをその内面から理解するための貴重な資料である。それを工夫すれば、学習の前後における児童の感じ方や考え方の変化を知ることができ、児童自身も学習での気付きや自己理解・自己評価を深めることができる。また、それを相互に交換すれば他者理解や相互理解を深めていくことができる。

なお、これらの記述に教師が受容的なコメントを加えて返却することは、教師と児童の心の触れ合いを深め、児童のよりよく生きる意欲を喚起することにもなる。

ウ 質問紙などによる方法

質問紙による方法は、教師があらかじめ作成した質問や児童が直面すると考えられる問題場面での児童の心情、判断やその理由などを回答してもらうことによって必要な情報を収集するものである。作文やノートなどと同様、道徳性にかかわる児童の自己評価を知る上で有効であるのみならず、児童自身が自己理解を深めることにも役に立つ。また、指導の前後に行えば、児童の自己評価の変化などを知ることができ、指導方法を評価し改善するための有益な資料ともなる。

しかし、これらにおける回答の内容は、児童を取り巻く環境や生活の様子、教師との人間関係などによって大きく左右されがちである。そのことを踏まえ、あくまで、児童が道徳性に関して自分自身のことをどのように理解し評価しているかを共感的に理解するための一資料として扱うべきものである。また、質問紙による方法を頻繁に行い、肝心の対応をおそろかにしていると、教師と児童との人間関係が損なわれることもあることに注意する必要がある。

エ 面接による方法

直接に児童と相対して話し合うことで、児童の道徳的な感じ方、考え方などを理解しようとする方法であり、場を明確に設定する場合と随時に行う場合が考えられる。この方法で大切なことは、児童の人格を尊重し、誠実に接しながら、児童自身が自己の内面を語るができるようにすることである。面接での対話が深まることによって、児童の話すことの内容や話し方や表情から、児童の内面をより深く

理解できるようになる。そのためには、面接の心構えや方法など、カウンセリングの在り方についての研修を深めるとともに、日常から児童と心の交流を通して親密な人間関係を築きあげる努力を重ねることが大切である。

オ その他の方法

これらのほかに、具体的な事例を検討する方法もある。この方法では、道徳的な成長への児童の努力の姿や教師の指導の効果などについて吟味することができ、児童一人一人がもつ課題の理解と指導に有効である。

また、各種のテストを用いる方法もある。その場合は、その目的や注意事項をよく理解して使用する必要がある。

3 評価の創意工夫と留意点

児童の道徳性を理解し、評価する場合には、以上のことを踏まえて整理するならば、全体として、次のような点に留意する必要がある。

- (1) 児童との心の触れ合いを通して得られる共感的理解を基盤として、児童自身のよりよく生きようとする意欲や努力に目を向けて、道徳性に関する自己理解・自己評価をその内面から理解していくように努める。
- (2) 児童理解の観点を固定的に考えず、児童のよさや個性を積極的に受け止め、多面的で幅広い視点に立った評価を心掛ける。
- (3) 児童一人一人の姿や変化を具体的に記述できるように努力し、個に目を向けた評価となるようにする。
- (4) 自分を表現する得意な面が児童によって違うことなどから、多様な方法を生かしながら評価するように努める。また、可能な場合、複数の人の評価資料を得て評価できるようにする。
- (5) 児童の一時期の様子だけで即断することなく、継続的に観察するなどして、長期的な視点に立った評価を心掛ける。
- (6) 評価の結果を児童の個に応じた指導や学級全体の指導に生かすようにする。特に指導を要する児童に気付けば、直ちに適切な指導を行わなければならない。また、計画を改善し、次の指導で生かすところまでつなげるようにする。

なお、道徳性の理解や評価のための資料の中には、児童の個人の私事に関する内容が含まれていることも多く、資料の収集の仕方及びその結果や収集した資料については慎重に扱う必要がある。

道徳の時間における児童の様子に関する評価においても、これらの留意点を踏まえるとともに、慎重かつ計画的に取り組む必要がある。道徳の時間は、児童の人格そのものに働き掛けるものであるため、その評価は難しい。しかし、可能な限り児童の変化をとらえ、それらを日常の指導や個別指導に生かしていくように努めなければならない。

道徳教育における児童についての評価は、自分自身が自己の生き方について道徳的価値とのかかわりにおいて自覚を深め、自己のより豊かな心の成長を実感できるように、道徳の時間における評価も生かしながら見通しをもって進めていくことが大切である。

平成 27 年	<p>第3 指導計画の作成と内容の取扱い</p> <p>4 児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。</p>
---------------	---